GOKURAKUJI DAYORI
極楽寺だより
2021(令和3)年 11月号

発行所：極楽寺（浄土真宗本願寺派）〒759-3803 山口県長門市三隅下野波瀬3633 ☎0837-43-0625

秋の永代経法要
聖徳太子一四〇〇回忌法要のご案内

ひさしぶりのご法座です

親鸞聖人は、聖徳太子を「和国の教主（日本のお釈迦様）」として、大変尊敬されました。

今年は、聖徳太子の一四〇〇回忌に当たります。永代経法要と共に、太子の遺徳を偲ぶ法要にしたいと思います。

十一月八日（月）
昼 一時半【野波瀬の方】
夜 七時半【自由参拝】

十一月九日（火）
昼 一時半【野波瀬以外の方】

講師 美祢市 明巌寺住職
中島昭念 師

※ 今回も、地区別に参拝日を分けました。ご都合により、違う日にお参りされても構いません。

※ 長門市におけるコロナ禍の状況次第で、急遽中止となる場合もあります。

※ 市外の方は、申し訳ありませんが、今回も参拝自粛をお願いします。

マスク着用をお忘れなく！

お寺にご連絡下さい。
日程を調整した上で、
お参りにうかがいます。

お取越しの季節です

「お取越し」とは、真宗寺院において最も大切な行事である親鸞聖人のご法事「報恩講」を、ご命日よりも取越して（早めて）各家々で勤めるという、真宗門徒にとって大切な伝統行事です。でも、どうして親戚でもない人の法事を勤めなくてはならないのでしょう。そこには、大切な心が込められているのです。

お取越しをお勤めしましょうキャンペーン

聖徳太子と親鸞聖人

お札に描かれた人物といえば？

今年のNHK大河ドラマ『晴天を衝け』の主人公は、近代日本経済の父といわれる渋沢栄一です。渋沢は、二〇二四年に発行予定の新紙幣（一万円札）に描かれることになっています。

ところで、紙幣に描かれた人物と聞いて、皆さんは誰を思い浮かべますか？私と同世代、もしくは上の世代なら、やはり聖徳太子ですよね。ほとんどの紙幣に、聖徳太子が描かれていた時期もありました。

では、聖徳太子とはどんな人かと問われると、どうでしょう。「和を以て貴しと為す」で有名な『憲法十七条』を制定したということは、よく知られていますが、やはり〝お札に描かれた人物〟というイメージが強すぎるのでは。実は、今年は太子の一四〇〇回忌に当たるのです。

聖徳太子は、推古天皇を補佐する摂政として、世襲ではなく能力を基準に人材を登用する『冠位十二階』を定め、当時の超大国・隋（中国）へ『遣隋使』を派遣し大陸の文化を取り入れた方です。また、一度に多くの人々から話しかけられても、正確に聞き分けられるほど聡明だった逸話は有名です。

そして何と言っても、日本で初めて仏教をきちんと理解し、広められた方なのです。『憲法十七条』は仏教精神に貫かれていますし、『四天王寺』や『法隆寺』を建設され、四天王寺内に貧しい民衆のための病院や薬局、福祉施設を置かれました。

聖徳太子が亡くなられて約六百年後に生まれられた親鸞聖人は、「和国の教主」（日本のお釈迦様）として太子を大変尊敬されていました。その為、浄土真宗の寺院には、聖徳太子の絵像が掲げられています（モチロン、極楽寺にもあります）。

聖徳太子は、日本人の鏡

駒澤大学の石井公成教授は、「日本の歴史上、聖徳太子ほど尊崇された人物はいないのではないか」と言われます。日本に仏教を広めた太子は、死後「観音菩薩の化身」「浄土への導き手」として信仰の対象とされました。しかし時代が進むにつれて、その敬い方は大きく変わります。大まかにまとめると、以下の通りです。

【戦国時代】 政敵である物部守屋を打ち破ったことから、太子に祈れば戦争に勝てるという『戦の神』として。

【江戸時代】 四天王寺・法隆寺などを造ったことから、『大工の神様』へ。

【江戸後期～明治初期】 国学や儒教が盛んになると、「聖徳太子は、仏教という異国の宗教を持ち込んだ、とんでもないヤツだ」という見方に変わる。

【明治時代】 日本が欧米列強の脅威にさらされると、「外国と対等に渡り合っていくには、西洋の技術や文化を取り入れなければならない」という機運が高まり、「遣隋使を派遣し、大陸の文化を取り入れながら、より優れた解釈を打ち出した聖徳太子こそが『日本人の理想』である」という見直しが始まる。

【太平洋戦争時】 すべての国民は天皇の元で一致団結、すなわち「和して」戦わねばならないと、「和の強制」「和による排除」が始まり『国家主義的な聖徳太子』が誕生する。

【終戦後】 『憲法十七条』という平和憲法を作り「平和と話し合いの意義を説いた」として、今度は『民主主義の元祖』として奉じられることになる。

このように日本の歴史と共に、イメージは大きく変わり、時には真逆へと変化していきました。こんな人物は、聖徳太子以外にはありません。それほど聖徳太子という存在は、人々の身近にあったのです。日本人は、一四〇〇年にわたり自分たち

の理想を聖徳太子に読み込み、シンボルとし、時には利用してきた。つまり聖徳太子の崇め方には、その時代の人々が求めるものが反映されている。まさに、「聖徳太子は日本人の鏡」だと石井先生は言われます。「聖徳太子とは何者か」という問いは、そのまま時代を、そして私たち自身を考えることなのではないかと。

（「聖徳太子とはなに者か」石井公成　学問する人のポータブルサイト・トイビト）

親鸞聖人の敬い方とは

では親鸞聖人は、どのように敬っておられたのでしょうか。親鸞聖人にとって聖徳太子は、日本のお釈迦様であり、また「観音菩薩の化身」だと受け止めておられたようです。

観音菩薩

親鸞聖人は、いつも人生の岐路に立たされた時、聖徳太子を道しるべとされました。若き苦悩の時。長年修行してきた比叡山を降り、法然聖人のもとに行くべきか迷った時。親鸞聖人はいつも、聖徳太子ゆかりの地へと足を運ばれ、夢のお告げを通して歩むべき方向を定められたのです。↘

哲学者の亀山純生先生は、聖人の苦悩には時代背景が大きく影響しており、「夢のお告げ」がその後の選択に重要な役割を果たしたと言われています。

災害社会と親鸞聖人

親鸞聖人の生きておられた時代は、自然災害が数多く起きた時代でした。幼少期からの十年間に、近畿地方だけでも五度の大地震（内二つは、関東大震災クラス）が起こり、その後も頻繁に続きます。

台風による洪水や山崩れもありました。大火災、疫病、寒冷化による凶作。そこに源氏と平家による内戦が絡み、天災人災相まって日本史上最大級の大飢饉が何度も起こっています。

親鸞聖人が生まれ育った京都は、人口が密集していこともあり、道路には餓死者が溢れ、河原は捨てられた遺体で埋まったとも言われます。

災害や飢饉の中で、自ら体験し、目の当たりにした悲惨な民衆の状況が、「自他共に救済する大乗仏教（特に民衆救済）↖

への志を深くした」のではないかと亀山先生は指摘されます。生身につきつけられた悲惨な経験を通して、共に救われていく道を求められたのだと。

この生涯を貫く思いは、再び続く大災害の中でますます危機感を強め、これまでの仏教の枠組みに対する疑問、そして堕落した仏教界への絶望へとつながったのだと言われるのです。

夢の役割

では、その絶望と夢には、どのような関係性があったのでしょう。私たち現代人は、夢のお告げを怪しげなものと受け止めがちですが、当時はとても重要視されていたのです。

現代の心理学でも、夢とは無意識が現れたものとも言われます。意識されなくても、言葉にはならなくても、自分の奥底で求めているものや問題点が、夢に現れる。ユング派心理学では、それが心の安定を保つために役立つのだとも言われています。

何より、道を求める者にとって夢とは、その決断を後押しするものなのだそうです。「今のままではいけない」と感じながらも、一歩が踏み出せない。そんな行き詰った状況への「超越的な世界からの応答」であり、飛躍する決断の背中を押すもの。それが「夢のお告げ」の意義なのだと。

（『〈災害社会〉・東国農民と親鸞浄土教』亀山純生）

幾多の災害の中で、見捨てられた人たちがいた。自身も、まさに被災者の一人として生きてきた。だからこそ、共に救われる道を求めて仏道を歩んでいたはずだった。しかし、それまでの仏教の枠組みでは、私にとって大切な人が救いからこぼれ落ちてしまう。そんな現実を知らされた。あの人たちが救われないのなら、私だけ救われても意味がない。では、共に救われていく道はどこにあるのか。親鸞聖人は、問い続けられたのでしょう。もしかすると、聖徳太子の「和を以て貴しと為す」に貫かれた精神にこそ、仏教の本質があるのではないか。そう考えられたのかもしれません。

そこには、当時の仏教界の主流から離れ、新たな道を歩まれていた法然聖人の存在がありました。法然聖人のもとへ向かうべきか。その思いがどこかにありながら、踏みだせない。長年に渡り積み重ねてきたものを、簡単には捨てることはできない。そんな行き詰った中で、聖徳太子の夢のお告げによって背中

を押されたのです。そして法然聖人のもとで、阿弥陀様の本願に出遇われ、「ここにこそ、私のために説かれた教えがあった」「すべての人々と共に救われることができる道と出遇うことができた」と感動された。共に歩むべき道が開かれた。それは「聖徳太子の導きによるものだった」と、親鸞聖人は受け止められました。

「観音菩薩」は、阿弥陀如来の慈悲のはたらきを象徴し、勢至菩薩は智慧を象徴する菩薩です。阿弥陀如来と共に、人々を導く菩薩なのです。聖徳太子を「観音菩薩の化身」として崇められたのは、まさに阿弥陀如来の本願（共に救われていく道）へと導かれた、その実感を通したものだったと言えるのではないでしょうか。

鏡に映った私たちの社会

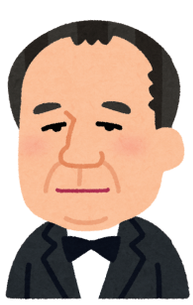
石井公成先生は、〔「聖徳太子は何者か」という問いは、そのまま時代を、そして私たち自身を考えることなのではないか〕と指摘されました。そして親鸞聖人が生きておられた時代と、聖人が求められたものを、聖徳太子の敬い方を通して味わってきました。↘

お取組を、お撮りましょうキャンペーン★お取組を、お撮りましょうキャンペーン★お取組を、お撮りましょうキャンペーン★お取組を、お撮りましょうキャンペーン★お取組

ならば、「聖徳太子といえばお札に書かれた人」というイメージの強い、私たちの世代はどうなのでしょう。聖徳太子をお金の象徴として拝む、経済優先の社会を作り上げた姿が見えてくるのでは。そんな気がします。

実は、このような状況を一番危惧したのは、新しいお札の顔となる渋沢栄一だったそうです。渋沢は、豊かな社会をつくるための手段（道具）として経済を考えていました。経済やビジネスが、個人の私利私欲のための手段になることに警鐘を鳴らしていたのです。しかし、残念ながら渋沢の思いは届かず、経済が何よりも優先され、人が経済の道具として扱われている。そんな社会となってしまったように思えます。モチロン経済はとても大切なものですが、あくまでも人や社会のためであり、経済のために人がいるわけではありません。

今年は東日本大震災という未曾有の災害を経験して、十年目となりましたが、当時は「絆」「助け合い」「支え合い」という、まさに「和」の貴さが叫ばれました。ところが今や、それはすっかり忘れ去られ、経済合理性の名の下に「迷惑をかける者や、生産性がない者は切り捨てろ」という言葉が飛び交っていま↖



渋沢栄一

す。自己責任だと突き放され、助けを求めることが許されない空気も強まっています。災害を通して、誰もが助けを必要とする立場になるかもしれないことを、知らされたのにも関わらず…。

そしてまた、新型コロナウィルスの感染拡大という災害が、世界を覆っています。こんな時代だからこそ、改めて助け合うこと、「和」の貴さを思わねばならないと痛感させられます。但しそれは、「和」を乱す者は許さないという「和の強制」「和による排除」ではありません。親鸞聖人が求められた「共に救われていく道」への歩みです。

一四〇〇回忌という節目の年に、聖徳太子への見方を鏡として、私の生き方を見つめ直す。そしてお取越し報恩講を通して、親鸞聖人が求められた道と出遇っていく。その大切さが、改めて思われます。厳しい状況だからこそ、先を歩まれた方々の導きを、味わっていきたいものです。■

極楽寺ホームページ

極楽寺.comで検索を

レイアウトをリニューアルしました

極楽寺だよりを送りませんか？

都会に出ておられる子どもさん、お孫さんたちへ。有縁の方々へ。お寺へお申し出下さい。直接郵送します。送り先が増えると、住職はうれしいのです。

近頃は、いろんな情報を気軽に手に入れることができる時代です。ところが、あふれた情報にふり回されてもいます。特に、不安をあおる宗教情報は危険です。また、仏事に関することについても、都会では気軽に相談するところがありません。少しでもお寺を身近に感じ、気軽に相談してもらうためにも、「極楽寺だより」がお役に立つのでは…、などと思っています。どうぞ遠慮なくお申し出ください。

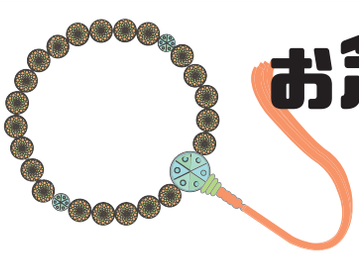
ギョーカイヨーゴ

お寺の業界用語

前回から始まった新コーナー、『お寺の業界用語』。
日頃耳慣れない、お寺で使われる言葉を知って、
お寺に親しんでいただけたらと思います。
「この言葉の意味が知りたい」という質問やリクエスト大歓迎です！

坊守（ぼうもり）

基本的には、住職の配偶者のことを言います。住職が未婚の場合は、前住職の配偶者が坊守と呼ばれ、家族などが勤める場合もあります。近頃は、女性住職も増えたので、同時に男性の坊守さんも増えてきました。
元々は、大寺院に所属する小さな寺院や僧侶の住居を「坊」と言い、その番人のことを言いました。
浄土真宗では、住職が外で道を説く時、内にあって坊（お寺）を守るというところから、住職の妻（昔は、女性住職はいなかったので）を「坊守」と言うようになりました。
真宗は世俗を生きる仏道ですから、他の宗派と違い親鸞聖人は妻帯されていました。そのため、伝統的に真宗の住職は妻帯していたのです。
業界内では、お寺は坊守さんで成り立っているというのが定説で、それは極楽寺にも当てはまります。



お念珠の修理いたします

お念珠のヒモは切れるもの。不吉なことではありません。
お寺で修理いたします。お持ちください。

仏事、葬儀、納骨…、わからないことや
困ったことがあれば、極楽寺にご相談ください。
ご遠慮なく、どうぞ　0837（43）0625

月々の言葉

Monthly Words

10月の言葉

「コペルニクス的転回」という言葉があります。物事の見方が180度変わるような、発想の転換を譬えたものです。コペルニクスとは、人の名前。このコペルニクスさんは、15~16世紀のポーランドの天文学者です。それまで地球を中心に太陽や星が回っていると考えられていた天動説に対し、太陽を中心に回っている星の一つが地球だという地動説を主張した方なのです。

どこを中心としているのか。それによって、世界の受け止め方は大きく変わります。自分中心に世界が回っているという考え方と、世界の中に自分があるという考えでは、見える景色も違います。自分の力で生きているつもりでいたのが、周りの人たちによって生かされていたと気づかされたら、人生そのものが大きく変わってくるはずです。

このように、これまで当たり前だと思っていたことがひっくり返り、世界が違って見えるような気づきを、コペルニクス的転回と言うのです。

浄土真宗は、「他力本願」の教えです。しかし巷では、「他力本願」というと「自分の力でなく、他人の力によって望みをかなえようとすること」「人まかせ」の意味に受け止められています。しかしこれは、大きな誤解です。自分中心に考えるからこそ、こんな誤解が生まれたのでしょう。

「他力」とは、阿弥陀様の「利他力=利他のはたらき」のことです。自分中心に考えるから「他人の力」と思ってしまうのでしょうが、浄土真宗では阿弥陀様を中心に考えます。つまり、「自」である阿弥陀様から「他」である私に、「利他のはたらき」がかけられていることをいうのです。

そもそも「本願」とは、自分の願いではなく、あくまでも阿弥陀様の願いです。迷いを迷いと気づかずに、さらに迷いを深

めている私に、「あなたを浄土に生まれさせ、敬われ、尊ばれる仏にさせよう」という阿弥陀様の願いが、私に届けられている。阿弥陀様の「利他」のはたらきが躍動し、導いてくださっている。これを「他力本願」と言うのです。そのことに気づき、目覚めた感動の中に歩むことが「他力」の生活なのです。

自分を中心に物事を見るのと、阿弥陀様を中心に見るのでは、まったく違います。自分中心で考えるから、他力は「人まかせ」の意味になるのです。しかし、阿弥陀様中心で考えれば、この私がどれだけ大切に思われているかが知らされてくる。同時に、どれほど深い迷いの中にいたのかにも気づかされる。言葉の意味も、見えてくる景色も、まったく違ってきます。

「拝むということは、拝まれていることに気づくこと」（東井義雄）という言葉があります。私が拝むよりも先に、阿弥陀様から願われ、拝まれていたという気づきが、人生の受け止め方を違うものに変えていく。まさに、コペルニクス的転回です。

私たちの先輩方は、阿弥陀様を中心にして人生を歩まれたのです。だからこそ、恵まれていること、いただいていること、そして恩ということに敏感になられたのだと思います。そんな世界と出遇うからこそ、「生かされていた」と感動し、感謝し、手を合わせる身に育てられるのだと教えられるのです。そうなると、「自分の力だけで生きている」などと、ふんぞり返ることはできません。

私たち浄土真宗本願寺派では、布教使（法話の専門家）養成のための学校があります。そこでは百日間、二人部屋の寮生活。気の合う二人だと楽しい時間でしょうが、人間には相性というものがありますから、気の合わない相手と同部屋だと地獄のような日々にもなりかねません。実は先日、気の合わない相手と百日間、同部屋になった人の話を聞いたのです。本当に、つらい日々だったようです。まあ、相手も同じ思いで過ごしていた

一般的な、「他力本願」の受け止め

自分の願いを、ヒトマカセにして結果を期待する

（自分の思いが中心）

「他力本願」の本意

阿弥陀様の願い（本願）がかけられていることに気づき、
阿弥陀様の利他力に包まれ、支えられていることに気づく

（阿弥陀様の願いが中心）

Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words

のかもしれませんが…。

その方は、寮生活を終えられて、言われたそうです。「あんな奴とだけは、一緒にお浄土に往きたくない」と。この気持ち、よくわかりますよね。私もそんな状況なら、きっと言ってしまいそうな言葉です。

でも、この話を聞きながら、私はある先輩の言葉を思い出していました。私たちお坊さんも、人間ですから愚痴も出ます。悪口を言うこともあります。先輩もお坊さんですが、モチロン愚痴も悪口も言われます。しかし最後には、いつもこう言われるのです。「あんな奴とでも、一緒にお浄土に往かなくてはならんのだなぁ」と。

「あんな奴とは、一緒にお浄土に往きたくない」

「あんな奴とでも、一緒にお浄土に往かなくてはならない」

よく似た言葉です。でも、この二つの言葉の中身は全く違います。前者は、阿弥陀様のお浄土という言葉を使いながらも、実は自分の思いが中心になっています。判断基準は、自分の好き嫌いなのです。私たちは自分中心から、なかなか抜け出せないのですね。気づけば、自分中心でものを考えてしまう。しかも自分が正しいと思っているから、そこにはブレーキはかかりません。↘

それに対して後者の言葉は、どこまでも阿弥陀様を中心とした言葉です。自分の好き嫌いは二の次になっています。モチロン私たちは人間ですから、嫌いな人もいるし愚痴も出る。そんな時、自分中心から、阿弥陀様を中心に考えてみる。

そこに「私の目には、嫌なヤツにしか見えないけれども、阿弥陀様から見ればどうだろうか。私もアイツも、共に願いをかけられ、拝まれている仲間なのではないか」という見方が生まれてくる。視点が変わり、ブレーキがかかり、景色が変わる。そして、生きる態度さえも変わることを教えられたのです。

コペルニクス的転回のように、自分中心から阿弥陀様中心の生き方に変わる。これを「他力」の生活というのです。気がつけば、ついつい自分中心の考えに陥りがちな私たちですが、手を合わせ、振り返る中で、また新たな気づきがいただける。そんな阿弥陀様中心の生き方をされた人々の歴史に、私も導かれ、育てられ、生かされています。■

こつこつがコツ

極楽寺掲示伝道

11月の言葉

「私はとにかく鈍やったんです。それで鈍やから、自分でいうたら可笑しいけれど、今のように大成したんやな。器用は上すべりしてしまう。器用はあかん。器用であれば、私らの仕事では上すべりしてしまって、出来てないのに出来たと思うてしまうんですな。チョイチョイとやって出来てしまうのが一番いかん。私は学校でも学生をみたし、後輩もみたけれど、器用なものはだめなんですな」（『人生を考える』藤沢量正）

人間国宝で、京都市立芸術大学長を勤められた陶芸家の近藤悠三さんは、このように言われています。しかし近頃は、「すぐに役に立つ」人やものが重宝される時代です。インターネットで検索すれば簡単に情報が入り、「三分でわかる」「五分で泣ける」といった言葉も、よく聞くようになりました。短時間、低コストで、最大の利益を得ようとする。頭だけで計算し、無駄を省き、最短距離を行こうとする。そんな、「チョイチョイとやって出来てしまう」器用な人に、多くの人がなろうとしている。近藤悠三さんの言われることとは、真逆の時代だと言えるでしょう。ちなみに近藤さんのこの言葉は、今から四十年以上前の対談で語られたもの。では近藤さんの考えは、時代遅れ、時代錯誤なのでしょうか。私には、そう思えないのです。いや、この言葉にこそ、とても大切なことが込められているのではないでしょうか。

近藤悠三

テレビでお馴染みのジャーナリスト・池上彰さんは、東京工業大学リベラルアーツセンターの教授でもあります。「リベラルアーツ」とは、「人間としての教養」のことを言います。東京工業大学といえば日本最高峰の理工系大学ですから、専門的なことだけを教えるのかと思いきや、同時に歴史や文学、人類学や心理学などの「教養」を重視しているのです。

世界でも屈指の名門校、アメリカのマサチューセッツ工科大学も同様で、「社会に出てすぐに役に立つ学問は教えない」

のだとか。なぜなら、先端的な科学技術・情報技術の分野は、それまでの知識は五年も経てば古くなる。大学で教えた時には最新でも、すぐに役に立たないものになる。だからこそ「科学が進んでも、常についていける。さらに新しい知識をきちんと身につけ、自ら開発していく力をつける」ために、人間としての基礎となる「教養」を教えるべきだと考えられているのです。

「すぐ役に立つことは、すぐ役に立たなくなる」（『読書論』小泉信三）という言葉があるように、目先のことに捉われてしまうと、幅広くものを見ることができなくなります。そこで、一見無駄や遠回りのようにみえる「教養」をじっくりと学び、世界を深く見る目を養う。専門的な学問と、生涯にわたり糧となる学びを関連づけて、人間としての基礎を身につける。それが視野を広げ、思い込みから自由（＝リベラル）になるための技（＝アーツ）を手に入れることに繋がる。これが「リベラルアーツ」を重視する考え方なのです。

（伊丹十三賞第5回受賞記念講演会　池上彰氏講演会）

私たちの社会は、合理的という名の下に無駄を省き、最短距離を行くことを良しとしています。そうなると、学び

を深めることよりも「すぐに役立つこと」「すぐに結果がでること」が優先されるようになる。器用な人ほど、それができてしまうので流されやすい。いつしか人間としての基礎を学ぶことが疎かになり、本質が見失われ、近藤さんの言葉で言えば「出来てもないのに、出来たと思う」「上すべりしてしまう」ことになってしまいます。

しかし、不器用な人はそうはいきません。簡単に答えを出せないからこそ、こつこつと時間をかけて向き合わざるを得ない。じっくりと基礎を身につけるしかない。器用な人から見れば無駄に見える失敗も、回り道も、足掻く時間も、自分そのものを成長させる大切な経験になるのでしょう。

同じくリベラルアーツセンター教授の伊藤亜紗さんは、自分の大学での役割を「学生に〝偶然〟を教えることだ」と言われます。理工系では計画通りに作る、作ったものが思い通りに動く、つまり「コントロール」が重要となります。しかし、そこばかりが重視されると、人間がすべてをコントロールできるかのような錯覚に陥りかねません。伊藤先生の専門はアートです。アートの場合は、作る過程で見つかる思いがけない発見、「偶然」の要素が大切にされます。そこから、人間

にはコントロールできない領域があることや、自然や生命への畏れを学んでいくのです。

また、科学は客観性が重視されますが、アートは主観性が重視されます。作品の見え方は、見る人によって違うのが当たり前。つまり、アートを通して「自分の見方がすべてではない」ことへの気づきや、多角的なものの見方、他者への尊重と共感を育もうとされるのです。

（東京工業大学リベラルアーツセンター教員インタビュー）

コントロールと偶然、客観性と主観性。どちらも大切なことです。私たちの社会生活は、発電所・道路・鉄道などのインフラが管理・計算・コントロールされることで成り立っています。科学的な判断に、主観を交えてはなりません。しかし、社会の問題はさまざまな要因が絡まり合い、そこに暮らす人間はそれぞれ見方や価値観が違う。自然は人間がコントロールできないし、思いがけない「偶然」が新たな発見を生むこともある。「自分の考えがすべてではない」という謙虚な姿勢を持つことで、思い込みから自由になれる。それが成長につながり、学びを深めることになるのです。

伊藤亜紗

Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words

それは近藤悠三さんにおいても、そうなのでしょう。なぜなら陶芸作品とは、長年培われた技術でコントロールするものと、「偶然」との中で生み出されるもの。陶芸にこつこつと向き合う中で、謙虚な態度と豊かな人間性を養われ、それがまた作品に反映されたのではないでしょうか。

真宗大谷派の僧侶・金子大榮先生は、友人である謡の名人から、このような話を教えられたそうです。

謡の場合も、二、三年で上達する器用な人は案外伸びず、不器用でこつこつ稽古している人が本物になっていくことが多い。なぜなら器用な人は、褒められると得意になり人に聞かせようとする。天狗になる。これが一番困る。だから本物になるためには、よき師匠につくことが大事。自分の「至らなさ」を教えられ、基礎からこつこつ稽古をする。そこでまた、師匠から至らないところを指導される。これを繰り返していく。

この謡の名人は、このように師匠について二、三十年稽古する中で、いつしか自分に教えることのできる先生が周りにい

なくなってしまいました。そこで、日本一と言われる師匠のところに伺い、聞いてもらうことにしたのです。するとその師匠から、「あなたは謡をうたいなされる場合、その謡を自分が本当に聞いておられるのですか。それとも人に聞かせようというお心ですか。それから人さまのよい謡をお聞きなさることがおありでしょうか」と言われました。その方は、この言葉に大きな衝撃を受けたそうです。振り返ってみると、いつの間にか人に聞かせようとしていて、聞こうとする心を見失っていたと。

これは仏道の歩みにも通じるのだと、金子先生は言われます。

「一番大事なことは、お聞かせにあずかることです。〝聞く耳を養う〟、至らない私を知ることがます一番大事なのだ」。そして「よき人にあう。一仏（阿弥陀様のこと）に遇い、一仏に帰依するということは、諸仏に遇い、諸仏に帰依することで、どんな方にも頭の下がる世界をいただくことが大事である。この心をいただけば、なにもかもが先生になってゆく」のだと。

（『み仏の影さまざまに』西元宗助）

おかしな言い方かもしれませんが、本物と言われる人ほど、自分が本物ではないことを知っておられるのではないでしょうか。「すぐに役に立つこと」に飛びつかない。自分の「至らなさ」を知り、「聞く耳」を養う。身につけたと思っても、気がつけば見失っているからこそ、自分を振り返りながら歩んでいく。そこには、近道などないのでしょう。まさに、「こつこつがコツ」だと教えられるのです。

そんな人たちの歩みと出遇うと、自分がいかに偽物であるかを思い知らされます。その気づきがまた、私を育ててくださるのです。■

古い仏具
使わないお線香
お寺へお持ちください
本堂に箱を用意しています！
正面から入って、右手奥に箱があります。

物でお布施

mono de OFUSE

家庭で眠っている物を、周りの人のために、活かしませんか。下記の物があれば、お寺までお持ちください。

書き損じはがき・未使用切手・未使用テレフォンカード・商品券やビール券など金券・CD・DVD・ゲームソフト・ゲーム機器など。

未使用タオルやバザー品となるようなものも、受け付けています！

プルトップも、集めています！

本堂正面から入って右手奥に、回収箱を用意しています。

❑全国的に緊急事態宣言が解除されましたが、まだまだ油断できない状況です。今月号が皆さんのお手元に届く時には、どうなっているのでしょうか。❑さて、外出が減ったこともあり、読書を満喫しています。お薦めは『弱さの研究』（向谷地生良 他）、『弱さのちから』（若松英輔）、『目が見えない人は世界をどう見ているのか』（伊藤亜紗）、『この国の不寛容の果てに』（雨宮処凛 編著）。あと、今頃になって遠藤周作の小説も読み込んでいます。実はこれらの本には、「弱さ」という共通するテーマがあります。近頃は、「強さ」ばかりを追い求める世の中になりましたが、私は「弱さ」と向き合い、そこにある輝きや豊かさを見い出す人たちに魅かれるのです。❑戦後の日本で、知的障害のある子どもたちの福祉と教育に一生を捧げられた糸賀一雄という方は、「この子らを世の光に」という言葉を残されています。「この子らに」ではなく、「この子らを」です。「この子らに」とした場合には、可哀想な子らに光を当ててあげようという見下した形になってしまいますが、「この子らを」という言葉には、【障害を持つこの子らの中にある、いのちの輝き、魅力、豊かさを見出すことができるほどに成長すれば、きっと心豊かな人間になれる。きっと豊かな社会になる】という信念が込められています。❑「強さ」はシンプルでわかりやすいですが、そればかりを追いかける時、小さな輝きは見落とされ、切り捨てられます。だから自分も切り捨てられぬようにと、強さを求め、弱さから目を背けている。それが私たちの生きている社会の有り様なのではないでしょうか。でもそのことで、生きづらさ、息苦しさを増しているように思います。弱さの中にこそ、本当の豊かさがある。そのことを、これらの本を通して教えられています。興味のある方は、如何でしょうか。多くの気づきをいただくことができます。（住職）

次回法座の予定

コロナ禍の状況を見ながら、どのような形で勤めるかを考えたいと思います。次号でお知らせします。